

真冬の寒中水泳。地元の学校の水泳部が水着姿を披露し、赤外線盗撮される

「当日は試合用の水着じゃなくて、男子はブーメランパンツを、女子はハイレグの水着を着てくるようにということだから」

I 高校水泳部の顧問、御厨が12人の部員たちを前にして言った。

「試合用だとなんでダメなんですか？」と部長の男子部員、高谷が言う。

「うーん、なんでもなあ、寒中水泳だと、最近の膝まである水着だと見栄えがよくないからだとか言ってたなあ」と顧問の御厨が言う。

「ハイレグ水着って、私たちそんなの持ってませんよ」と女子部員の根山夏帆が言った。

「そうだよなあ。でも、昔の、何年も前に卒業した先輩の水着が部室のどっかにあると思うから、それ着て出てくれないか。買うのもお金かかるし、面倒だと思うから」と御厨が言う。

「マジで最悪なんだけど」

根山と数人の女子部員たちがぶつくさ言いながら、部室へ向かった。

数週間後に、近くの海岸で寒中水泳が行われる。

この催しは、復興祈念をこめられた寒中水泳だった。

大震災から10数年後ということで、復興もだ

いぶ進んできた。

でも、その歩みを止めてはいけないということで、復興祈念の寒中水泳が企画された。

この寒中水泳に、近隣の中学や高校の水泳部は、強制的に参加させられることになった。

しかも、水着の指定があった。

男子はウエットスーツ型の水着はNGで、ブーメランパンツが指定された。女子もウエットスーツ型はダメで、ハイレグの水着のみということだった。

寒中水泳の水着として、ウエットスーツ型では見栄えが悪いからという理由らしい。

この寒中水泳の企画は、県と市と村と、町内会も絡んできている。

I高校水泳部は、冬場は近隣にある、I市が運営する温水プールで練習をさせてもらっている。

公共の施設である温水プールを利用させてもらっている手前、寒中水泳の参加を断ることができなかった。

同じ理由で、近隣の中学校、高校の水泳部員が駆り出されることとなった。

「ハイレグ水着だけとか、絶対エロい目的だよね」と根山夏帆の友人の水瀬栞が言う。

根山と水瀬は高校2年で、水泳部女子の中心的なメンバーだった。

「だろうね、でも仕方ないよ」と根山夏帆が答えた。

「これかな」と水瀬が部室の奥の段ボールの中にあつた水着を取り出しながら言う。

「これっぽいねえ」と根山が答える。

他の女子部員たちも寄ってきて、みんなでその水着を見る。

I高校水泳部は全部で部員が12名でそのうち、女子は7名だった。

すでに、3年は部活を引退しているので、今いるのは、1,2年だけだ。

「なんかすごく古くない、この水着」と水瀬が言う。

「そうねえ。何年前くらいの水着だろ」と根山が言う。

部室にあつた女性用競泳水着は、ピンク色の水着だった。

それがちょうど今の女子部員の人数分と同じ7着あつた。

「ピンクとか趣味悪っ」

「誰が買ったんだろうね、こんな水着」

女子部員たちが口々に言っている。

「おーどうだー」と後ろから顧問の御厨が声をかけてきた。

「一応ありましたけど」と根山が振り返りながら答える。

「おーよかったじゃん。じゃあ、みんなでそれ着ていけるな。ちょうどみんな同じ水着で統一感あるし、いいんじゃないね」と御厨が言う。

「先生、別で違う水着買ってもいいですか。なんか、この水着だいぶ古いみたいなので」と根山が言う。

「まあいいけど、別にこれでいいんじゃない。ハイレグの水着なんて、この日だけしか使わないだろうから、買う必要もないだろ」と御厨がのんきに言う。

「まあ、それはそうなんですけど」と根山が小さく言う。

結局、女子部員たちはこのピンクのハイレグ水着を着て、寒中水泳に出ることになった。

根山はその水着を家に持ち帰って試しに着てみた。

サイズの的には問題はなかったけど、なんか少し透けてる気がする。

胸の部分が、今使っている競泳水着と比べると薄い気がする。

もし、乳首が勃ってしまったら、目立ってしまうんじゃないかと思った。

友人の水瀬葉にラインで連絡しようかと思ったけど、何と切り出せばいいかを思い悩む。

それにめんどくささもあったし、寒中水泳なんてたった1日だけのことだ。

水泳部なので水着になるのは普通のことだし、乳首が少し目立ったとしても気にしすぎだろうという気持ちもあった。

でも、寒中水泳の当日は、テレビとかの取材もいっぱいいくと言っていたなと、根山夏帆は思い出した。

なんか嫌だなあと思ったけど、それ以上は水着については考えないことにした。

寒中水泳は大々的に宣伝されているようだった。

ネットでも広告を出して、宣伝していた。

復興祈念の寒中水泳なので、当日はメディアもかなり駆けつける予定だった。

寒中水泳の当日になった。

根山たち I 高校水泳部の面々は、それぞれ学校の体操服の下に水着を着こんで、海水浴場へ到着した。

夏場は海水浴場として運営されているけど、冬の今は、冷たい風が容赦なく吹きつけて、立っているだけでも寒い。

そんな中で、これから、水着一枚にならないといけない。

水泳部員たちは憂鬱だったけど、女子部員たちは別の意味でも憂鬱だった。

ハイレグの水着を皆の前で披露しないといけない。

しかも、予想以上に人が多い。

大きなビデオカメラを構えた、テレビ局の人も多いけど、一般の人も多く来ている。

スマホではないちゃんとしたカメラを構えている人が、ざっと見て、100 人近くいる。

なんだか、ものすごく大きな重そうなカメラを構えている人もいる。

この後、スマホを取り出して撮影する人も出てくるだろうから、150 人くらいに水着姿を撮影されてしまうのではないか。

しかも、この寒中水泳は地域のローカルテレビ